

## 7 馬場地域の景観

### ①馬場地域の概要

#### 1 自治区の成立（※1～2は『緒方町誌 区誌編』を参考にした）

江戸期	岡藩領軸丸組（馬場村、下自在村、軸丸村から成る）。
明治 22 年(1889)	町村制実施により、緒方村大字馬場となる。
昭和 25 年(1950)	町制施行により、緒方町大字馬場となる。
平成 17 年(2005)	町村合併により、豊後大野市緒方町馬場となる。

#### 2 主な出来事

寛文 2 年(1662)	緒方上井手開鑿。
寛文 11 年(1671)	緒方下井手の掘り貫きが完成し通水。
安政 6 年(1859)	岡藩主中川久成が軸丸組下自在・馬場村で田植見物（御覧田植）。
明治 42 年(1909)	緒方尋常高等小学校開校。
大正 11 年(1922)	緒方駅開業。鳴滝橋竣工。鉄道開通に伴い、緒方盆地内の圃場が鉄道敷により分断される。
昭和 7 年(1932)	緒方村役場新築。
昭和 10 年(1935)	緒方尋常高等小学校舎竣工。
昭和 33 年(1958)	緒方町役場新築。
昭和 51 年(1976)	緒方町健康保険病院（通称、大野郡立病院）開業。緒方小学校新築。
平成 元年(1989)	緒方駅新築。
平成 4 年(1992)	緒方郵便局移転新築。
平成 8 年(1996)	緒方町役場改築。
平成 16 年(2004)	公立おがた総合病院開業（旧病院の新築移転）。

#### 3 馬場地域の構成・人口など

組合名	市口一組、市口二組、中央通、西新町一組、西新町二組、西新町三組、 判田一組、判田二組、天神下一組、天神下二組、光枝一組、光枝二組、光枝三組 東新町、柏木一組、柏木二組、栢木三組、栢木四組、松山一組、松山二組、松山 三組、松山五組、駅前住宅、フォレスト、病院宿舎
戸数・人口	338 戸、702 人（令和元年 12 月）

### ②馬場地域の立地と環境

馬場地域は、江戸時代には軸丸組（馬場村・軸丸村・下自在村）に属していた。人口は馬場村 215 人、下自在村 333 人、軸丸村 477 人で三村の中で最も少なかった。明治 4 年の廃藩置県の後、大区小区制が布かれ、明治 11 年に郡区町村編成法が公布された。明治 17 年に戸長役場所轄区域が定められ、上自在村・下自在村・軸丸村・越生村・馬場村・井上村・野尻村の役所が馬場村に置かれた。明治 22 年に町村制が実施され、7ヶ村の役所の位置が馬場村に定められ、明治 24 年に新庁舎落成式が行われた。その後、大正 11 年に豊肥線緒方駅が開業し、それに伴って鉄道の北東側に次々と商店が開業した。大正 11 年から 15 年にかけて開業した商店数は 21 店舗である。

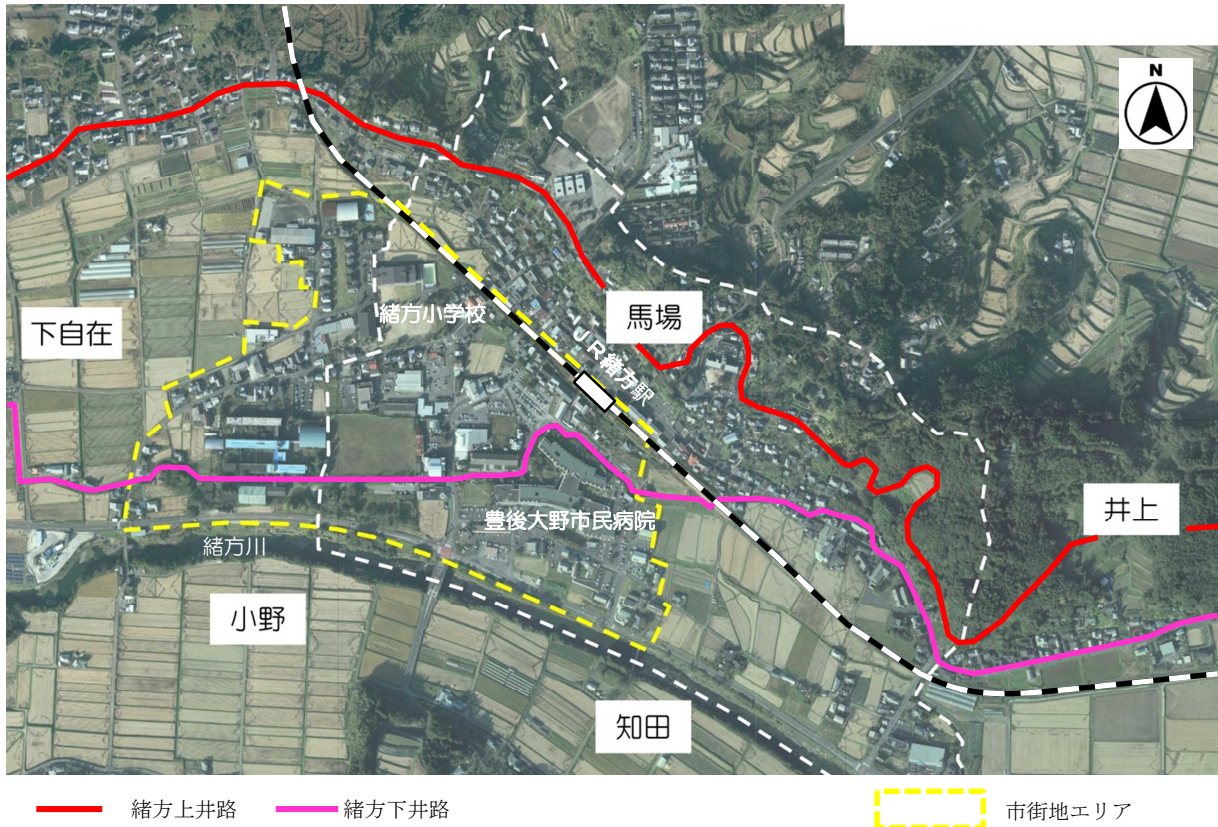


写真 57 馬場地域の位置

馬場地域は、昭和 7 年には下自在・軸丸の人口を抜き、緒方村で最も人口が多い集落になった。昭和 7 年は、緒方村・南緒方村が合併し新たに緒方村が発足した年でもある。その象徴として、緒方盆地北側の高台に緒方村役場が新築された（写真 58）。現在、旧緒方村役場庁舎として国登録有形文化財になっている。昭和 10 年には、建築予定地が懸案となっていた新・緒方尋常高等小学校舎が新築された。合併後に緒方村内の遠隔地から児童が通うのに適した場所を選定するため、各集落から陳情が相次ぎ、候補地がなかなか決まらなかったが、合併後 3 年を経て緒方盆地の圃場内に建築することが決まった。新築後に 1,236 人の児童が学ぶ校舎と 1,500 人が収容できる講堂を建築するため、広い圃場の中に大きな区画を割いて緒方尋常高等小学校が開校した（写真 59、60）。昭和 10 年 12

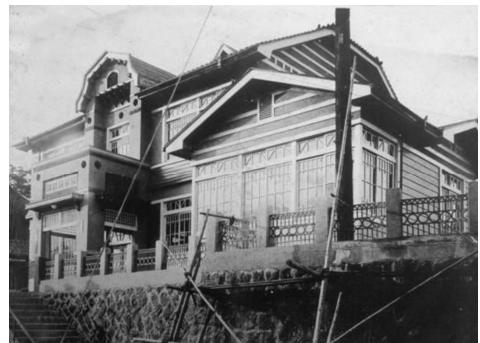


写真 58 完成直後の緒方村役場



写真 59 小学校と馬場集落



写真 60 建築当時の緒方尋常高等小学校





写真 61 学校敷地内の足洗い場

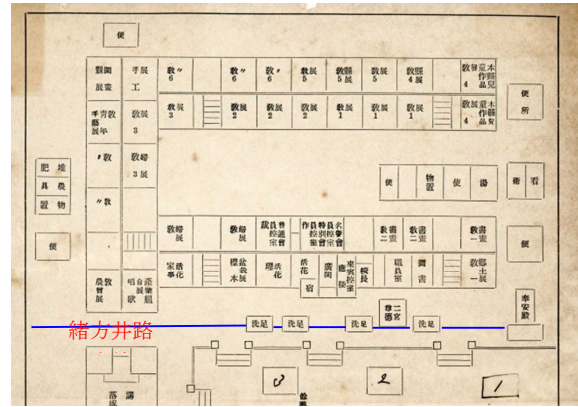


写真 62 足洗い場の位置図

月 13 日付けの大分新聞には「躍進の大緒方 縣下一を誇る小學校の落成」と大々的に報じている。取材を受けた小学校長太田正直は、「井路利用の足洗い場等備わり、衛生上から見ても申し分ないものである」とコメントしている。緒方井路の支線が小学校敷地内を通っているため、わざわざ足洗い場を 4 ヲ所設けている。井路網が発達した緒方ならではのエピソードである。写真 61 は昭和 16 年頃の足洗い場の写真で、写真 62 は昭和 10 年緒方尋常高等小學校開校記念式典の会場配置図に描かれた 4 ヲ所の足洗い場である（※井路線は、加筆）。写真 59 は、昭和 23 年の馬場地域の空中写真である。緒方村・南緒方村の合併後 10 年を経ても、小學校以外の建物が圃場内にはほとんどできていない。

第 2 次世界大戦終結から 10 年が経過した昭和 30 年に、緒方町・長谷川村・上緒方村・小富士村が合併し、新しい緒方町が発足した。昭和 31 年に緒方中学校が緒方小學校西側に建築された。昭和 33 年になり合併後の新役場庁舎が緒方小學校の南側に建設された。そして、県立緒方工業高校（昭和 38）、緒方郵便局（昭和 40）、緒方保育園（昭和 44）、緒方公民館（昭和 46）、歴史民俗資料館（昭和 59）などの公共施設、A コープ緒方店（昭和 51）やぶんど大野農協緒方支店、大型食品店・衣料店が緒方町役場周辺に建築され、馬場地域の市街地化が進んだ。

「豊後大野市景観計画」では、緒方盆地を「緒方盆地文化的景観（景観形成重点地区）」と定め、その中を「田園エリア」と「市街地エリア」に区別している。写真 57 の黄色い破線で囲んだ範囲は、開発行為が進み旧来の農村景観が著しく変貌している地域であるため「市街地エリア」とし、「田園エリア」よりも規制を緩くしている。

### ③馬場地域を潤す井路と圃場

馬場地域は、旧緒方町の中心地であり、経済発展に伴って圃場が宅地化し水田景観は大きく変わってしまった。現在は、集落の北西と南東に圃場が残されている。緒方盆地内では、昭和 48 年から大規模な県営圃場整備が始まるが、馬場地域では緒方小學校や町役場周辺の圃場で宅地化が進んでいたため、県営圃場整備が行われることはなかった。そのため現存する圃場 A・B・C（図 49）は、水田開墾当時の面影をある程度残している。

図 49 で示した圃場 A・B は緒方上井路（黄着色）に、圃場 C は緒方下井路（緑着色）により灌漑される水田である。圃場 A と B は、大正 11 年の豊肥線鉄道開通に伴い分断された農地である。圃場 C は、産業道路建設や一部農地の宅地化に伴って、緒方下井路の支線に変更が生じている。

写真 57 は、井路本線と支線の流れを詳細に示すため、空中写真に井路線を落としたものである。緒方下井路は、豊後大野市民病院の建設に伴って流路が北側に大きく変更されている。



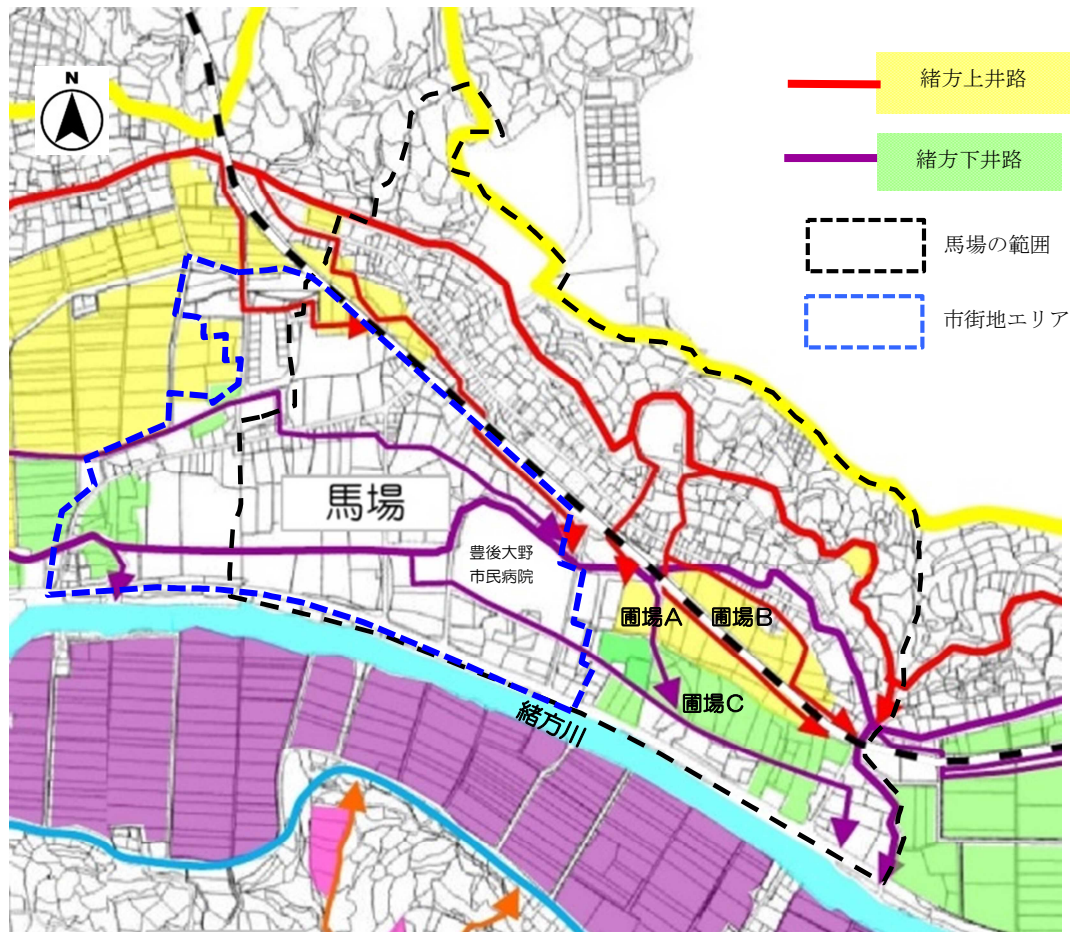


図 49 馬場地域の圃場と井路

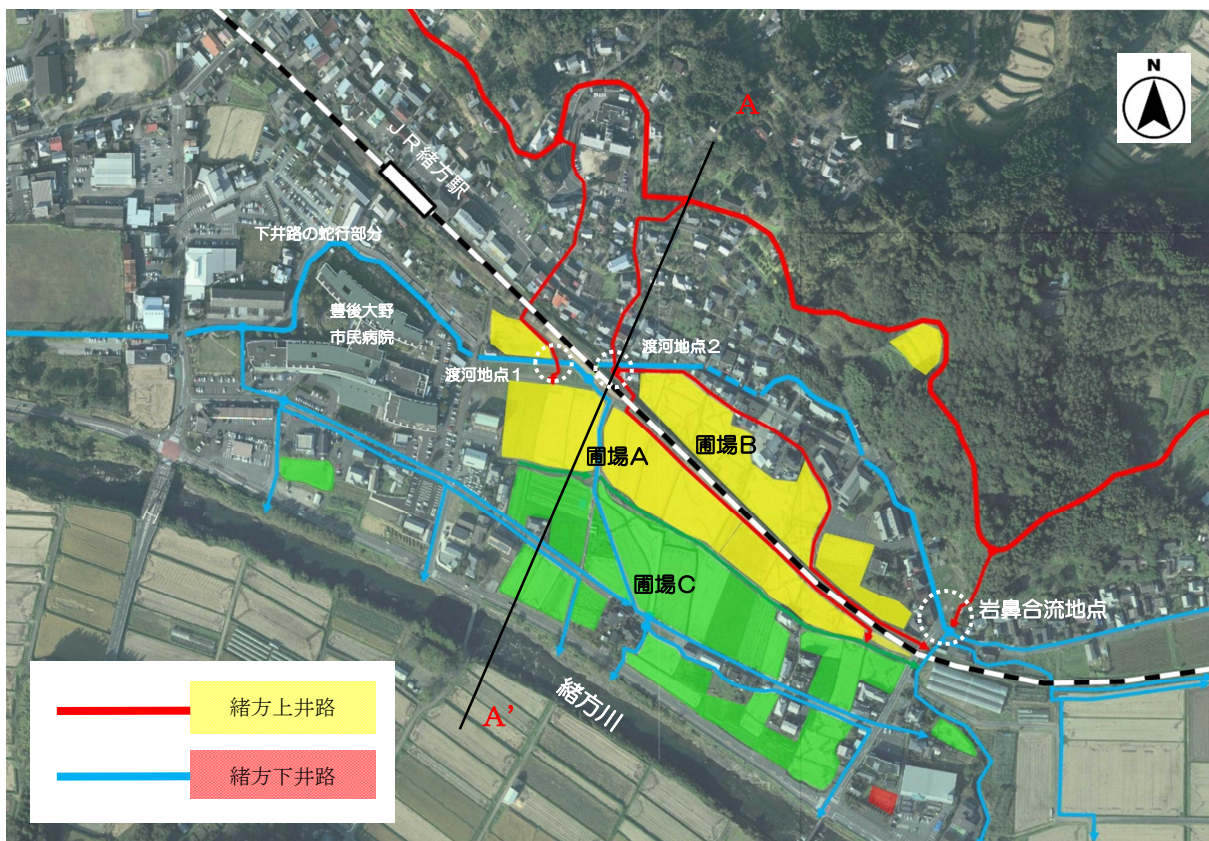


写真 63 馬場地域の圃場と井路



図 49 は、緒方上井路・下井路により灌漑される圃場を色分けしたものである。ここで注目される点は、黄色に着色された圃場 A・B は、すぐ横に緒方下井路が流れていながら下井路の水で灌漑できずに、かなり離れた緒方上井路の水で灌漑されていることである。この理由は、緒方下井路の水流が、圃場 A・B の標高よりも相当低いところを流れており、緒方上井路の水を使うしかないためである。圃場 A と圃場 C は近接しているのであるが、二つの井路により灌漑されているということは、平坦で良好な水田に見えながらも、水の確保が容易ではない土地であることを示している。写真 63 の渡河地点 1・渡河地点 2 は、緒方上井路の水が緒方下井路の上を渡り圃場 B を潤す水路橋が架かっている場所である（写真 64）。



写真 64 渡河地点 1（写真左）、渡河地点 2（写真右）

図 50 は、写真 63 に示した A-A' 間の断面模式図である。圃場 A と圃場 C は近接した土地で標高差はほとんどないように見える。しかしながら緒方下井路の水面が低いため、圃場 A はその水を利用することができず、距離が約 250m・標高差が約 23m もある緒方上井路から灌漑用水を取水するしかない（写真 65）。平坦な土地で緒方井路の豊富な水を容易に使うことができるよう



写真 65 緒方下井路と隣接する圃場 A

であるが、実態は土地の状況によって灌漑用水を引くのに苦労していることがわかる場所なのである。

左の写真 65 は、圃場 A の一部である。横を流れるのは緒方下井路であるが、水面がかなり低いため水田への自然流水では灌漑ができない。そのため、尾根伝いを流れる緒方上井路の水を引き、灌漑している。写真 66 は、圃

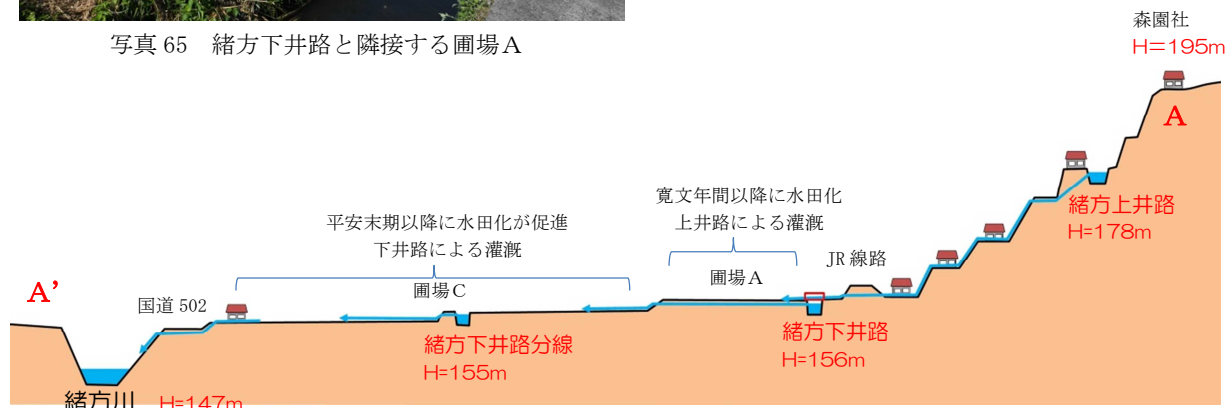


図 50 馬場地域の井路と断面模式図（A-A' 間）

場Bとそのすぐ隣を流れる緒方下井路である。ここでも下井路が深いため、水田を潤す水は緒方上井路から導水し、下井路の上を渡河し田に運ばれる。



写真 66 緒方下井路に近接しながら上井路で灌漑される圃場B

#### ④馬場地域の旧字図と現況

図 51 は、明治 21 年調製の馬場地域の字図である。宅地は北側の丘陵地帯に分布している。これは上自在・下自在地域と同様に、圃場を活かすために丘陵地側に宅地が形成されたためである。

稲作のために緒方盆地の圃場を水田として維持してきたわけであるが、昭和 10 年に新・緒方尋

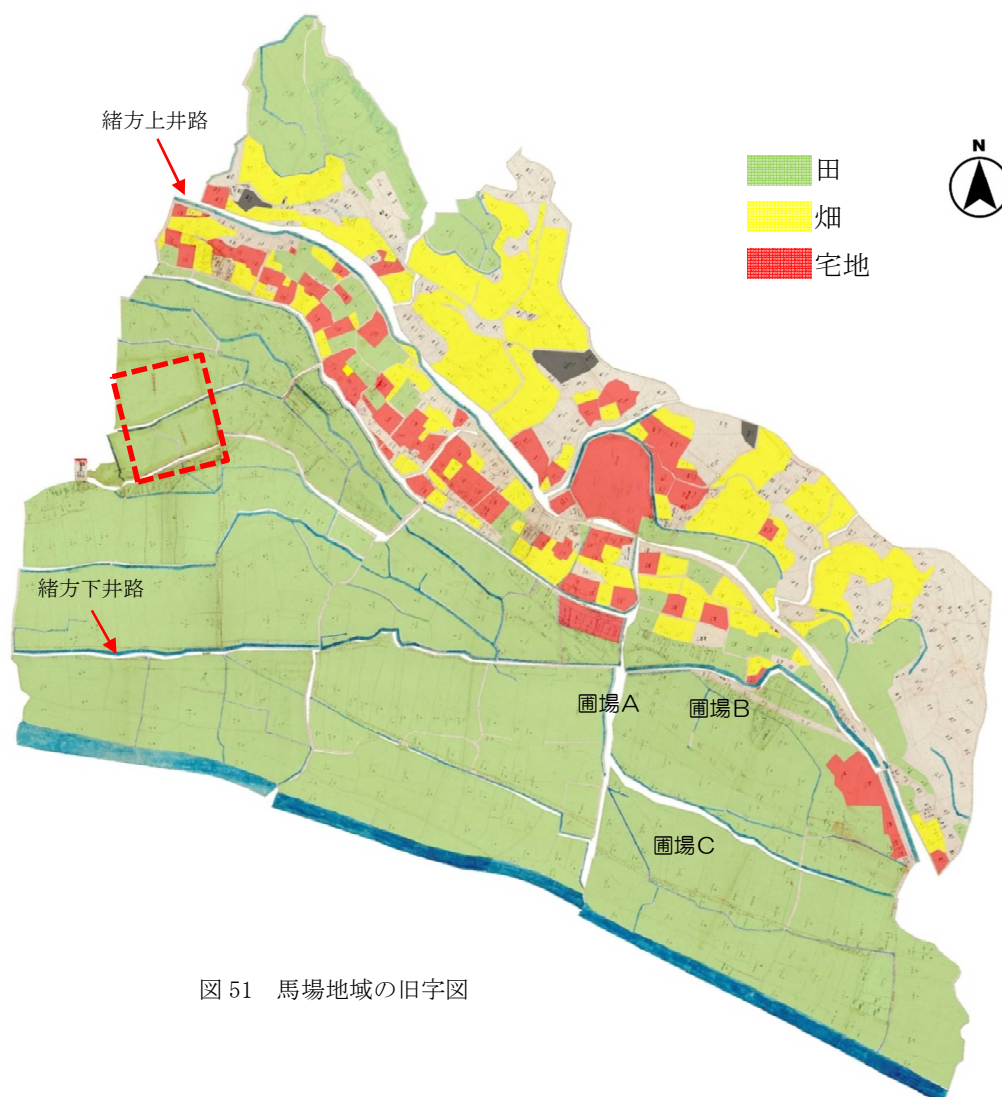


図 51 馬場地域の旧字図



常高等小学校の校舎が、圃場内に広大な面積を費やして建築された（赤破線の位置）。緒方村と南緒方村は昭和7年に合併したが、新小学校の建設反対運動や新築場所の選定で大いにもめて、3年後にようやく緒方盆地の圃場内に校舎を新築することになった。緒方川の南にある南緒方村の児童や緒方村内の遠隔地から通う児童（総数は1,200名を超した）の便宜を図るため、広大な圃場内に学校を建築するしかなかった。これが馬場地域の圃場が宅地化していく嚆矢となったといえよう。

図52は、現在の字図に田・畑・宅地を着色したものである。馬場地域の市街地化した状況が一目瞭然である。図51と比較してみると、豊肥線鉄道の南側に宅地が形成され、水田は大幅に減少している。馬場地域は、町の中心地になり、役所や小中学校・県立高校の建設、大型店舗の建設、市民病院の移転、人口集中による宅地化などで、旧来の圃場の姿は非常に見えにくい。しかしながら、圃場A・B・Cのように、緒方上・下井路を利用する見事な圃場が、古い形を残しながら宅地の間に営まれているのである。

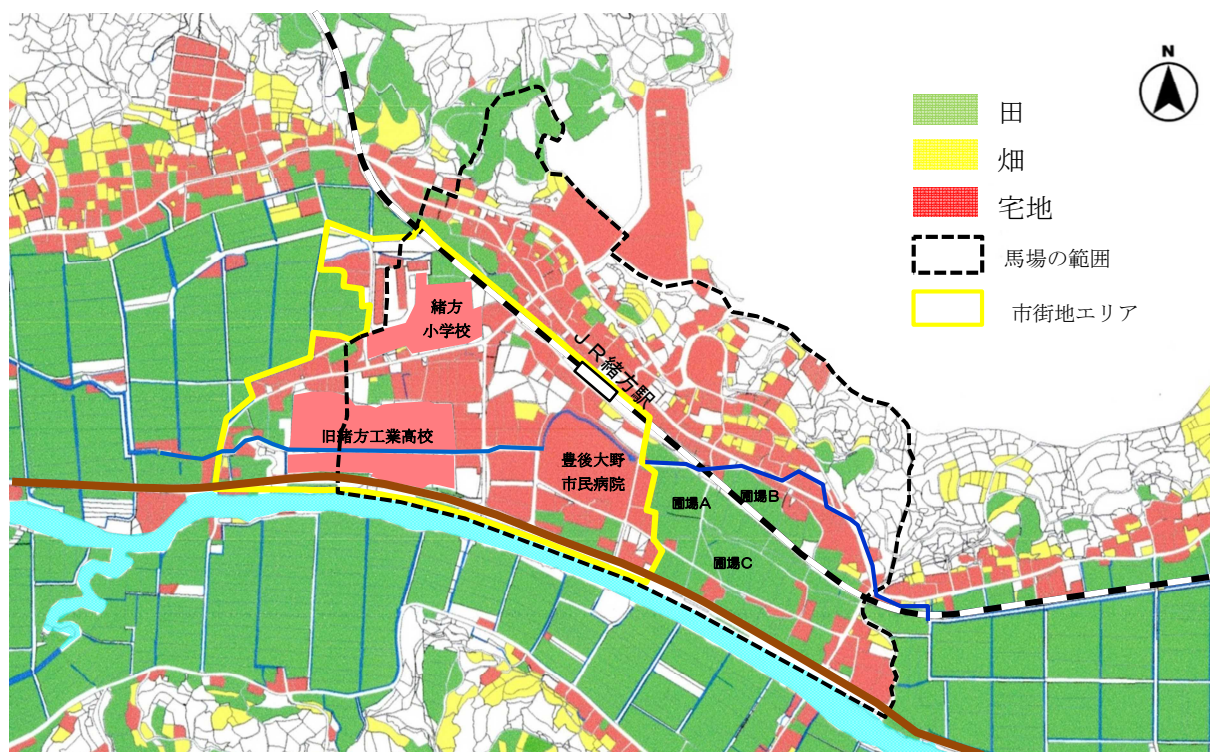


図52 馬場地域の現地籍図

### ⑤ 緒方上井路と下井路のクンバ（汲ん場）

馬場地域では緒方上井路沿いに10カ所、下井路沿いに3ヶ所の汲ん場が確認できた（写真68）。馬場地域の集落は、上自在や下自在集落のように、民家の大部分が井路に沿って立ち並ぶという状態ではない。そのため、人口の多い割には汲ん場が少なかった。13ヶ所の汲ん場のうち「掘込階段式汲ん場」は12ヶ所で、「コンクリートの張出階段式汲ん場」は僅か1ヶ所のみであった。写真67

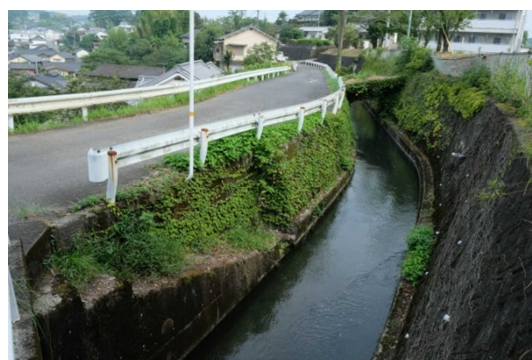


写真67 掘込階段式汲ん場



の汲ん場は緒方上井路で、道路と井路水面の標高差が大きいので、階段と斜めの通路で水面に至るように造られている。

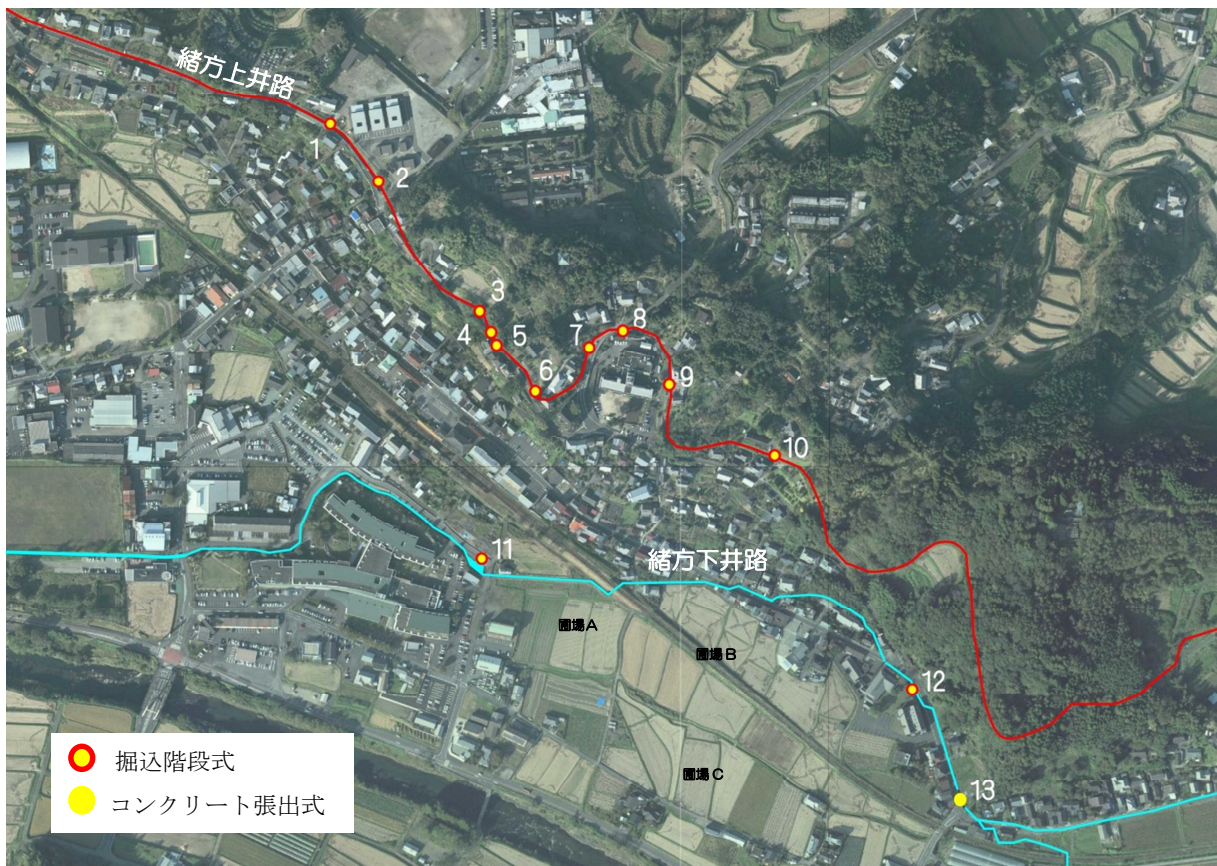


写真 68 馬場地域の汲ん場位置図

### ⑥馬場地域の景観の構成要素

馬場地域は、江戸時代は軸丸組に助属し、嘉永7年（1857）の人口は、軸丸村（477人）、下自在村（333人）、馬場村が215人で最も少なかった。その後、緒方地域の中心地として明治以降に発展し現在に至っている。現代的な建物が多く建設され、明治・大正・昭和初期の建築物はほとんど残っていない。豊肥線緒方駅舎（大正11年建設）や緒方尋常高等小学校（昭和10年建設）などの近代化を物語る建物も建て替えられて残っていない。その中で、昭和7年に建設された緒方村役場庁舎は現存し、往時を偲ばせる威容を誇っている。馬場地域は市街地化しながらも、集落の東側に圃場A・B・Cのように、古い時代の地割が今も残っている。

表 12 馬場地域の景観の構成要素

番号	要素名	写真	説明
1	馬場市口石橋		旧民家橋であるが、病院建設に伴って民家が移転したため、緒方上井路の上にアーチ式石橋のみが残っている。



番号	要素名	写真	説明
2	加藤家のイノコ		イノコの後背の山は低いが豊富な水が湧くイノコである。凝灰岩にトンネルを奥深く穿ち、入口を広め、高さ70cmほどのコンクリート壁を設けて、貯水できるようにしている。馬場自治区に12箇所あるイノコの一つである。
3	旧緒方村役場庁舎		昭和7年に緒方村と南緒方村が合併し、緒方村側の高台に新庁舎が建築された。昭和初期の官公署建物として大分県で唯一現存する木造建築物である。外壁の一部にスクラッチタイルを使用し和洋折衷の雰囲気を保っている。
4	森園天満社		緒方五千石祭には15体の神輿が集うが、そのうちの 하나가安置されている神社。2月に森園天満社梅祭りが開催され、神楽が奉納される。緒方盆地の圃場を見渡せる高台にある。
5	大正橋		6本の長い石を緒方上井路に渡し架けて桁橋としている。森園天満社の参道橋である。大正14年(1925)1月に架橋され、橋長3.15m、橋幅3.04mの石橋である。
6	県営緒方井路改修記念碑(昭和28年5月1日建立)		昭和8～昭和10年にかけて上井路幹線の改修を行ったが、下井路と野尻・越生・原尻・野仲地域の井路改修が開鑿当時のままで荒れている。そこで昭和24～28にかけて井路改修を行った。「緒方五千石軒を連ねて倉庫満つるに至るべし」の銘文が秀逸である。

番号	要素名	写真	説明
7	東仙寺供養塔		緒方川沿いに東仙寺という寺があり、天正年間の島津大友戦争の戦死者を供養するため建てられたという。五輪塔の地輪と思しき台座には元亨2年(1322)の銘があり、12名の名が刻まれる。緒方盆地全面が水田化する以前の遺物として興味深い。

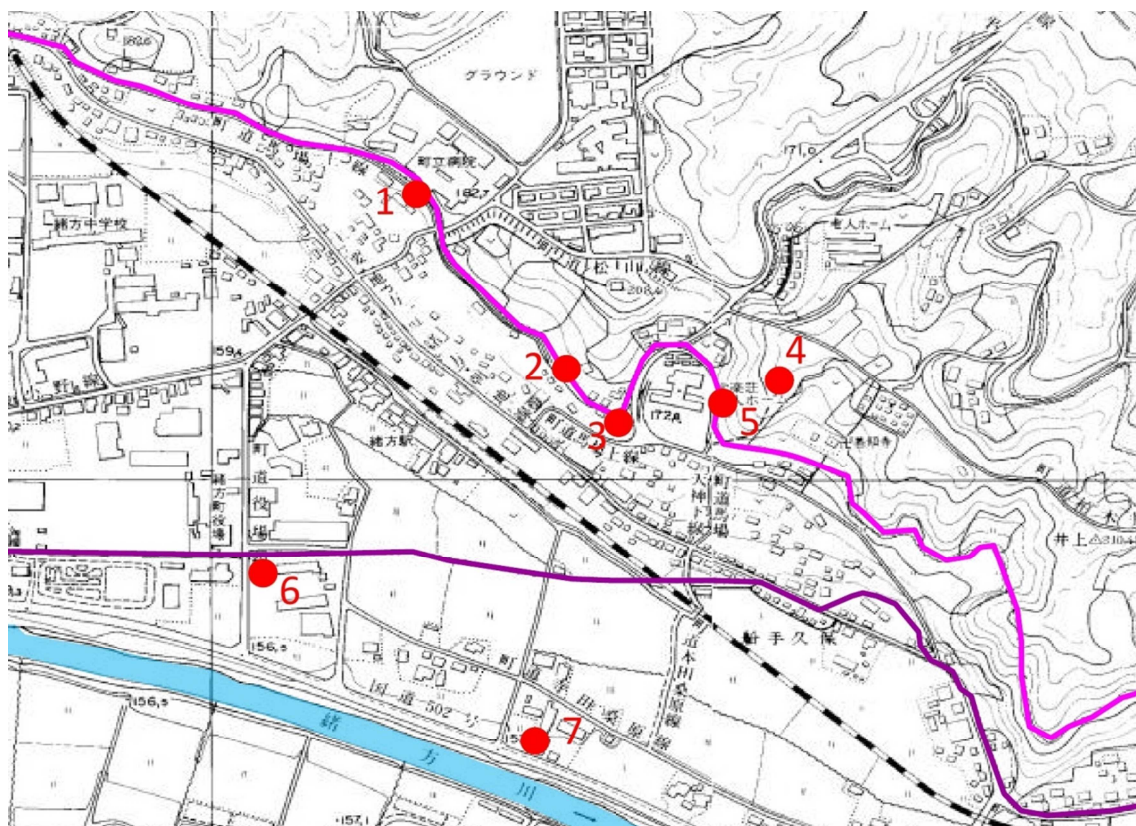


図 53 馬場地域の構成要素位置図